



# M&A専門誌

Mergers & Acquisitions  
Research Report

## MARR マール

2007 July 7月号

発行人 高橋 豊  
Yutaka Takahashi

編集長 川端 久雄  
Hisao Kawabata

制作進行 加藤 順子  
Junko Kato

表紙写真 十文字 美信  
Bishin Jumonji

アート  
ディレクション 石崎 路浩  
Michihiro Ishizaki

デザイン 斎藤 圭太  
Keita Saito

本文写真 福本 敏雄  
Toshio Fukumoto

印刷 三松堂印刷株式会社

発行所：株式会社レコフ

〒102-0083 東京都千代田区麹町4-1-1

麹町ダイヤモンドビル

TEL.03-3221-4942

2007年7月1日発行 通巻153号

雑誌18321-07

定価2,310円 本体2,200円

RECOF

## 編集室から

### BOOK

#### 『M&A無形資産評価の実務』

デロイト トーマツFAS編

清文社

2800円（本体）



企業はヒト、モノ、カネからなるが、最近は無形資産の重要性が認識されている。価値を生み出す源泉は、無形資産であることに気づき、特許権などの知的財産戦略を重視する企業も多くなっている。こうした無形資産を目的としたM&Aも増えている。

無形資産にはどのようなものがある、評価はどうするのか。本書は、会計やM&Aの実務家らが日本だけでなく、この分野の先進国米国の実務や会計基準のことも含めて解説している。M&Aに携わる者にとって、格好の実務書である。

日本では財務諸表等規則で無形資産として特許権やソフトウェアなどを列挙している。しかし、無形資産全般の会計基準はなく、「研究開発費等の会計基準」でソフトウェアを取り扱っているぐらいである。このため従来、企業結合に際し認識する無形資産の範囲は狭く理解されてきた。法律上の権利以外の無形資産を認識する例はあまりなかったという。

しかし、2006年度から始まった企業結合会計基準では、無形資産の価額が算定できる場合、取得原価を無形資産に配分することができるとし、適用指針で認識要件や具体例を列挙している。財務諸表等規則より広範で具体的になっている。法律上の権利としては半導体集積回路配置、営業上の機密事項、フランチャイズ契約などが、また譲渡可能なものとして顧客リスト、データベースなどが例示されている。

こうした無形資産をどう評価したらいいのか。本書では、コストアプローチ、マーケットアプローチ、インカムアプローチの3つ方法を解説している。さらに無形資産を、市場関連、顧客関連、技術関連、人的資産など7つに分類し、それぞれどの評価方法が適しているのかを詳説している。

M&Aでは通常、企業価値評価が行われる。これは、M&A取引の前にいくらかで取得するのが妥当かをビジネス目的で計算するものだ。会計処理では、ディールが確定したあと、この取得価額をもとに、有形資産や無形資産に配分していく。差額がのれんになる。このように定量化することで、買い手は対象会社の何を買ったのか、どのようなバリュードライバー（価値創造のキーとなる要素）を獲得したのかが分かり、会計上もM&Aの目的が無形資産の取得にあったこと、キャッシュ・フローを生み出す源泉が何かが鮮明になる。

M&Aで無形資産評価の重要性が増していることの影響を受けて、会計の世界も変わってきている。DCF法などの評価手法が会計基準にも影響を与える。会計と評価の融合が進み、会計でも会計基準と評価手法の双方の理解が必要になっているという。

本書には、米国企業がどのような無形資産を計上しているかの事例も紹介されている。日本と比べて、顧客関連や技術関連で多くの無形資産を計上していることや、知的財産戦略を重視していることが財務面からも分かる。日本が企業結合会計基準でプーリング法を一部残した点も含め、日本の会計制度の遅れを痛感する。（青）

## 編集後記

インタビューをしたい人の記事などがあると、切り取ってファイルに差し込む。数は増える一方だが、それに紛れて「仕事の励み」と書き込んだのがある。数年前、映画監督の新藤兼人さんのことを書いた記事が始まりだ。当時88歳の新藤さんは、「人は一生仕事をして生きる」「何のために生きているかと問われれば、躊躇なくわたしは仕事のために生きていると答える」「仕事とは、『私』であり続けること」などと語っていた。

こう言い放つ新藤さんの原点が何なのか。ずっと疑問だったが、最近、新藤さんが書いているものを読んで分かった。農家に嫁いだ母は田に出ては、何万もある稲株を掘り起こしていく。そして、とうとう最後の1株を起す。その粘り強いエネルギーを、子供のころは分からなかったが、「大きくなって、わたしが仕事をするようになって、しびれるほどの感動で思い出すのだ」とあった。ああ、やはり働く姿は美しいのだ。（開）

本誌の記事およびデータの著作権は原則として株式会社レコフに帰属します。いかなる目的であれ当社に無断で本誌記事の複製、引用、転載等を行うことを禁じます。また、本誌記事の情報は、当社が信頼できると考える各方面から取得しておりますが、その内容の正確性、完全性が保証されているものではありません。当社は本誌記事に起因して被った損害については、その内容如何にかかわらず一切の責任を負いません。乱丁・落丁の場合はお取り替えいたします。マール室（03-3221-4942）までご連絡ください。